

2023年10月15日（聖霊降臨後第20主日、特定23、A年）

牧師メッセージ

「感謝と賛美はわたしたちの務めです」

（マタイによる福音書22:1-14）

司祭 ヨセフ 太田信三

今週も主イエスは祭司長や長老たちに向けたとえを語ります。最初の「二人の息子」のたとえでは「洗礼者ヨハネ」が、続く「ぶどう園と農夫」のたとえでは、隅の親石となる「主イエス」が登場しました。続く今日の福音、第三のたとえでは主イエスの復活と再臨の間を生きる「教会」について語られます。

主イエスが救いを完成するために再臨する日がやってきます。その日は、最後の審判の「怖い」日のようにイメージしがちですが、いよいよわたしたちが主イエスと顔と顔を合わせることができる、喜びに溢れた日です。だからこそ今日のたとえで、その日は「王子の婚宴」として描かれます。王なる神が心を尽くして用意してくださる喜びの宴の日こそ、再臨の日なのです。

王は準備に準備を重ね、予め招待していた人々を呼ばせませんが、人々は来ようとしませんでした。それでも、もう一度主人は迎えに行かせます。けれども人々はそれを無視するどころか、その家来たちを捕まえて、殺してしまう者までいました。この「招いておいた人々」とは、祭司長や長老たちを指します。彼らは神のもたらす救い=婚宴に価値を見いださず、目先のことにばかり身も心も注いでいます。殺されてしまった家来たちとは、祭司長や長老たちのように、神の招きに背いてきた人々によって殺された預言者たちだと読むことができます。しかし、この人々は結局王の怒りに触れ、滅ぼされることになってしまいます。つまり、祭司長や長老たち、宗教的指導者たちは救いへの優先権を奪われることになってしまうのです。

王は三度目には、招待した客ではなく道で出会うすべての人を招くよう命じます。そして、「善人も悪人も」すべての人が集まり、婚宴は客でいっぱいになりました。花婿である王子の登場を待っている人々の姿は、死んで復活した主イエスが再び来るのを待つ「教会」の姿を表しています。主人はすべての人を招き、教会に迎えます。ただし、そこから追い出されてしまうことになる人がいます。教会から「悪人」は排除されませんが、「婚礼の礼服」を着ていない者は外の闇へと投げ出されてしまうのです。道で声をかけられ集まって来た人々は、王の食事が最高のものであることに気づくことができました。「礼服を着ていない者」も、それに気づいた一人です。けれども彼はその食事が、誰が招いた婚宴であるかを把握していませんでした。誰が招いた宴かをわきまえていたなら、王への敬意を表し、「婚礼の礼服」を身に着けたはずだからです。つまり、神が期待することは、ただ食事の席に参加することだけではなく、招いてくださった方を知って、宴席に連なることなのです。主なる神が準備を重ね、迎えてくださる宴です。食卓を整え、招いてくださる神の恵みに感謝し、その感謝の思いをもって婚宴に出席するなら、「礼服」をまとってその場に向かうはずです。それゆえ「礼服」とは、救いに招かれていることへの感謝だということができます。日々、神の恵みを感じ、その恵みをいただくなかで、感謝とともに生きることこそ、ふさわしい礼服をまとうことなのです。

わたしたちもまた、神の宴に招かれています。わたしたちにはすでに、神の大いなる愛と、恵みが注がれているということです。その神さまへの感謝の気持ちを込めて礼拝に参加するなら、華美でなくとも、その心は自然とその姿に表れ、神さまに伝わることでしょう。